

生育は順調で、ほぼ平年並みに推移しています。

7月は適正な穂数やもみ数を確保し、出穂前の稲の活力を整える重要な時期です。病害虫対策を徹底し、稲を健全に保ちましょう。

## 1. 食味・品質を重視した米づくり

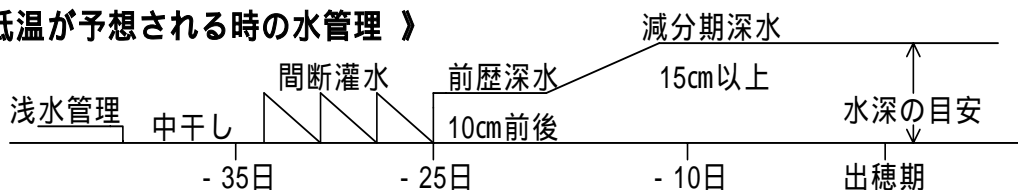
(1) 幼穂形成期(7月10日頃)までに作溝・中干しを終了し、間断かん水に切り換えましょう。

・中干し終了後は走り水を行い、飽水管理(足跡に水がたまる程度)とし、その後、徐々に間断かん水に切り替えましょう。

### 間断かん水のポイント

- ・日減水深が2~3cmのほ場では、2日湛水・2日落水(2湛2落)を基本とします。
- ・日減水深が2cm以下(水もちが良い)のほ場では落水期間を長くし、2湛3落とします。
- ・高温(30以上)時や強風時には、一時的な湛水(5cm程度)で稲を保護しましょう。
- ・異常低温(最低気温が17以下)時には水深15cm以上の深水管理とします。

### 《低温が予想される時の水管理》



- ・出穂25日前頃から10cm程度の深水(前歴深水)とすることで、分化する花粉の量を増やし、低温時の稲の受精能力を高めます。但し、山間部等で水温が18以下と冷たい場合には逆効果となります。このような場合は温水チューブ等を活用し、水温を高めるなどして対応します。

(2) おいしい米づくりを目指し、適正な穂肥施用を徹底しましょう。

- ・穂肥の量が多かったり、施用時期が遅れると、結果として玄米に含まれるタンパクが高まり、食味が低下します。
- ・穂肥は品種に応じた適期適量を基本とし、葉色が濃い場合は量を減じて適期に施用します。下表を参考に、実際に田で確認して施用します。

### 《穂肥施用量・施用時期の目安》

品種	N 施用量 (kg/10a)	施肥時期	追肥時の葉色		出穂期(平坦) 平年	穂肥適期(平坦) 平年
		出穂前日数	葉色板	SPAD		
あきたこまち	1.0~1.5	20日	4.8	38	8/5	7/15
ひとめぼれ	1.0~1.5	20日	4.7	37	8/10	7/20
はえぬき	1.5~2.0	25日	4.8	37	8/11	7/15
コシヒカリ	1.0~1.5	15日	3.9	29	8/16	7/31

中山間の穂肥適期は平坦の2~3日後になります。

(3) 6月11日に、すでに「葉いもち」が確認されています。

- 今すぐ、ほ場を見回り、「葉いもち」を発見したら、直ちに治療効果の高い剤で防除しましょう。
- 葉いもち予防の箱施用剤を使用したところでも、7月上旬頃には予防効果が低下している可能性があります。水口付近の葉色の濃いところ、葉のたれているところは要注意！

(4) カメムシの生息が管内各地で確認されています。



- 草刈りは畦畔だけでなく農道や水路、休耕田等、水田周辺の草むらも行いましょう。
- 7月下旬からは農薬（殺虫剤）散布の直前に一斉草刈りを行いましょう。

斑点米カメムシ類の好む草



イタリアンライグラス



レッドトップ



オオバコ

## 2. 直播による省力・低コストの米づくり

- (1) 目標茎数（550本/m<sup>2</sup>）を確保した後は、中干しと作溝を行いましょう。
- (2) 穂肥は移植栽培よりも、ひかえめに施用しましょう。

< 直播はえぬきの穂肥診断 >

7月10日の生育 茎数 葉色	生育不足 600本/m <sup>2</sup> 以下 35未満	適正な生育 600～700本/m <sup>2</sup> 35～40	過剰生育 700本/m <sup>2</sup> 以上 40以上	過剰生育 750本/m <sup>2</sup> 以上 40以上
穂肥対応の 目安	出穂前25日まで N1.5kg/10a	出穂前25日 N1.5kg/10a	出穂前20日 N1.0～1.5kg/10a	追肥は行わない

農薬は登録内容にしたがって、適正に使用しましょう！